

日本は半世紀近くにわたり世界でも有数のシルク輸出国であり、高所得者層しか購入できなかった絹を中級所得者層が楽しめるものに変化させた。しかし、日本の絹産業は、ナイロンなどの合成繊維が1930年代に導入され、絹より手頃な価格になった際、大きな打撃を受けた。第二次世界大戦中にアメリカとの貿易が途絶えると、状況は悪化した。戦後、日本の絹の需要は着実に減少し、日本のカイコ農家と製糸工場に閉鎖を強いることとなった。これには富岡製糸場も含まれ、1987年に休業することとなった。日本全体で今もまだ約300世帯が養蚕業を行っており、この絹を加工するために、日本には2つの巻取工場がある。ひとつは安中市の富岡から20キロほどのところにある碓氷製糸株式会社だ。

1959年に碓氷製糸農業協同組合として設立され、碓氷シルクは日本の絹生産の維持にとって重要となった。この地域はもはや絹の生産では知られていないが、この工場では絹に加工するために日本中で生産された繭の多くを取り入れている。